

# 芥川龍之介「玄鶴山房」論

## －<離れ>という空間(トポス)－

早澤正人\*  
mh03108830@gmail.com

### ＜目次＞

- |               |             |
|---------------|-------------|
| 1. はじめに       | 4. 母性の両義性   |
| 2. 「玄鶴山房」について | 5. 「離れ」について |
| 3. 忌避される「男」性  | 6. むすびに     |

主題語: 女嫌い (Misogyny)、男嫌い (misandry)、トポロジー (topology)、ユング心理学 (Jungian psychology)、隅っこ (sumikko)

## 1. はじめに

文学テキストについて考察する際、しばしば言及されるトピックの一つに「空間」(トポス)をめぐる問題というものがある。

たとえば、前田愛(1982)『都市空間のなかの文学』(筑摩書房)では、ロトマンの説を参照にしながら、森鷗外「舞姫」(初出「国民之友」1890年1月)などの空間構造について分析しており、市川浩(1984)『<身>の構造』(青土社)も、空間の問題を身体と結びつけて論じている。ほか、奥野健男(1999)『文学のトポロジー』(河出書房)なども、文学テキストにおける家(居間、寝室、書斎など)と登場人物との関係性について考察を加えたものである。

もちろん、こうした空間構造の分析は、芥川の文学テキストを考察する際にも有効である。――実際、筆者は、かつて芥川の中期文学である「素戔鳴尊」(初出「大阪毎日新聞」1920年3-6月)、「雛」(初出「中央公論」1923年3月)といったテキストを空間(トポス)の問題に着目して、分析したことがある<sup>1)</sup>。

---

\* 仁川大学校師範大学日語教育科 助教授

1) 「素戔鳴尊」については、「「素戔鳴尊」論――<父性原理>と<母性原理>をめぐる問題――」(『日本近代學研究』第48輯、2015)で、「雛」については、「芥川龍之介「雛」論――空間構造の視点から――」(『文学部・文学研究科 学術研究論集』第2号、2012)で、それぞれ論じている。

もっとも、そのような考察を通じて、筆者が特に気になったのが、芥川テキストの空間における「隅っこ」の問題になる。この「隅っこ」というのは、家屋や住居の離れや端(はし)、その他、洞窟や穴倉などの場所をいう。奥野健男(1972)『文学における原風景』(集英社)の次の説明をみよう。

“隅っこ”という感覚も、根源的には“洞窟”的感覚である。(略)あるいは住居、家屋が、女性を中心につくられ、家屋と女性とが、殆んどわがちがたく重なりあっているとすれば、それは母のふところに抱かれている、あるいは母に外界から庇護されている内的空間、究極的には母の胎内、子宮そのものに通じる。そこから大地への地母神的感覚で、“洞窟”や家屋が母胎の延長として、安らぎの内的空間として意識される。つまり“隅っこ”とは自分を外界から守ってくれる生の根源的空間である(p.109)

ここで奥野は、「住居・家屋」はもともと「女性を中心に作られて」いるとした上で、「隅っこ」という空間(トポス)が、「母の胎内」、「子宮」の表象として結びつけられると指摘しているが、このような意味での「隅っこ」は、前述した「雛」や「素戔鳴尊」といった芥川のテキストにも表れている。

たとえば、以前、筆者が論じたのは「雛」というテキストが<土蔵 / 見世 / 外界>という三つの空間に分節化されていることであり、そして、このうち「土蔵」という家屋の「隅っこ」なる場所が、「母」のいる空間であり、母親のキャラクターと結びついたトポスとなっているということであった。一方「素戔鳴尊」では、主人公が「洞窟」という「隅っこ」に閉じこもってしまう場面があるが、筆者はそのような「洞窟」を母胎=子宮の表象となっていると指摘した。

このように、芥川テキストでは、「雛」や「素戔鳴尊」などのように、しばしば「隅っこ」にある薄暗いじめじめした空間が、母胎(あるいは子宮)の表象のような場所として、機能することがある。そのような空間は、「雛」のヒロインにとっては安息の場所となり、「素戔鳴尊」の主人公においては(再び父性を獲得するための)抜け出す場所となっている。

そして、今回取り上げる「玄鶴山房」にも、このような「隅っこ」が描かれている。それは具体的には「離れ」という空間のことになる<sup>2)</sup>。そこは病床の主人公が横たわっている場所

2) 「玄鶴山房」の「離れ」が「素戔鳴尊」の「洞窟」と同じような空間になっているということは、既に水洞幸夫(1985)「「玄鶴山房」試論—閉じ込められた<鏡>と<匂>—」『金沢大学国語国文10』によって指摘されている。芥川作品には、この「玄鶴山房」の「離れ」のようなほの暗い空間がよく登場する。そしてそこにはしばしば<匂>が濃密にたちこめている。「素戔鳴尊」に出てくる、女ばかりが住んでいる洞窟などはその最も端的なものである。(略)山房の背後には(略)「素戔鳴尊」の洞窟につながっていくような母胎のイ

(トポス)になるが、この空間は主人公を否応なしに死へと追い込むような、絶望的・地獄的な場所ともなっている。

では、なぜ「離れ」＝「隅っこ」が、本作では地獄的な空間(トポス)となるのか。本論では、そのような事柄を念頭に置きつつ、芥川晩年の代表作でもあるこの「玄鶴山房」を題材に、本作が表象しているものとは何か——また、そこから浮かび上がってくる芥川文学晩年の問題とは何か、という問題について考察する。

## 2. 「玄鶴山房」について

まずは、書誌など本作の概観の確認から始めよう。周知のように「玄鶴山房」は、昭和2年(1927年)1、2月に「中央公論」に発表された小説である。

内容としては、「ゴム印の特許」や「地所の売買」等で、財を築いた老人(堀越玄鶴)の死を描いた話になる。彼はいわば新興ブルジョワジーで、一生を「浅ましい」我執の内に費やした人物。現在は、肺病に罹り、死の床についているが、その心はまったく安らかではない。彼は、自身の浅ましい一生について考えたり、家庭内の女たちの神経戦のような争いを目の当たりにしたりして苦しんでいる。また、彼自身は気づいていないが、看護婦の甲野によって陰湿な嫌がらせも受けている。そうして、最終的に主人公は死ぬが、その「死」にドラマはなく、ただ火葬場で淡々と家族に処理される。そういう話である。

このような「玄鶴山房」は、従来から芥川晩年の力作の一つとされ、これまで様々な角度から検証がなされてきたものであるが、そうした先行研究のなかで、比較的良好に指摘されている問題として、リイブクネヒト(ドイツの社会主義者)をめぐる問題がある。というのも、本作の末尾では、玄鶴の葬式後、リイブクネヒトの「追憶録」を読む大学生の姿が描かれているのであるが、このリイブクネヒトが最後に現れる事で、「玄鶴山房」という物語もまた、単に玄鶴の死や、家庭内の話だけで完結するのではなく、広く新時代(社会主義によって表象される新しい時代)まで射程に入れたスケールの小説になっているというのである。

このことは、作者の芥川自身、「新時代の存在乃至到来を何らかの形で玄鶴山房に暗示し

---

メージへの志向が読み取れはしないだろうか。(p.71)

このように、水洞は「離れ」(玄鶴山房)と「洞窟」(素戔鳴尊)の類縁性を指摘している。もっとも、水洞の指摘は、あくまで問題提起的なもので、これ以上詳細な分析はしていない。本稿はこうした水洞の指摘を踏まえてそれを発展させたものとしてもよい。

ないでをられなかった」(青野季吉宛書簡 1927年3月)と認めていることもあり、早くから研究の俎上に載せられていた。たとえば、「リイプクネヒトを読む大学生を登場させたりするのは、新しい時代への気兼ねでしかない」と述べた山本健吉(1943)や、下層階級のお芳が山房内のエゴイズムに対置せられて、最後のリイプクネヒトの問題に結びついていく事を説いた蓮池文雄(1957)などがそれである。また、「追憶録」の内容に注目して、「リイプクネヒト=社会主義=新時代」ではなく、この書に描かれているマルクスの「人間的なもの」こそ重要だとした平岡敏夫(1969)や、「芥川にとっての「新時代」は思想的に措定されたものというより、自身を「旧時代」と決めつけることによって浮上」する「蜃気楼の如きもの」とした海老井英次(1972)なども、芥川晩年の問題を、リイプクネヒトをキーワードに考察したといえる。

一方、リイプクネヒトと並行して、「玄鶴山房」の「地獄」的な世界というものに注目するものもある。たとえば、次の評を読んでみよう。

芥川は、『孤独地獄』とか、『地獄変』とか、いふ題をつけた作品では、殆んど『地獄』のやうなものが書けなかった、ところが、『玄鶴山房』で、やうやく『地獄』に近い感じのものを出した。/しかし、それも、あの世の地獄ではなく、この世の地獄のやうなものである。——宇野浩二(1953)

人生からとくに暗澹たる陰鬱な面のみを拾い上げて来たかの(ママ)、暗い感じがする。(略)彼の見ている人生を暗示している。——吉田精一(1942)

ここで吉田が述べているように、「玄鶴山房」は、芥川晩年の陰鬱な心象風景を描いた作品であり、そこに芥川晩年の問題をみる向きもある。たとえば、その地獄的な世界を、反自然に生きた芥川の「故郷喪失」の表れ(東郷克美)としたり、「羅生門」と比較し、「悪が悪を許す」ような世界ではない事を指摘したり(濱崎俊一)「人間の実存の存在悪」を描いた(三好行雄)としたりするのは、<山房=地獄的な世界>を前提とした読みといえるだろう。その他、橋浦洋志(1995)や三嶋義(1980)などのように作品構成や視点に着目して論じたものや、水洞幸夫(1985)や海老井英次(1983)、金静姫(1994)のように空間の問題等に着目して研究したものもある。

いずれにせよ、「玄鶴山房」は、見てきたように、リイプクネヒトに代表される「新時代」の問題や、地獄的な世界の内実を通して、芥川晩年の問題を考察するという事を軸に、様々な角度から研究が進められてきたといつてよいだろう。そして、今回、本稿で試みたいのは、このような研究史の流れも踏まえつつ、先にも述べた「離れ」という「隅っこ」を「子

宮」の表象と見立てることで、従来から問題にされてきた「地獄よりも地獄的な」芥川文学晩年の問題の内実について、これまでとは異なった角度から分析する事である。以下、次章では物語の舞台となる山房内の特徴についてみていくことにしよう。

### 3. 忌避される「男」性

「玄鶴山房」は、全六章で構成され、各章はそれぞれ語り手(「一」)、重吉(「二」)、お鈴(「三」)、甲野(「四」)、玄鶴(「五」)、重吉(「六」)を焦点人物として語られている<sup>3)</sup>。もっとも、よく指摘されるように、最初の「一」章と最後の「六」章は山房外の世界であり、これが「二」~「五」章を挟み込む形で配置されている。いわば「枠組み小説」の形式をとった小説である。

このような章立てについて、橋浦前掲論は「全節が孤立した時間-不連続さで構成されている」とし、それが「玄鶴山房の中心の不在-孤独と地獄を創出している」と述べており、また、西原千博(1980)は、平岡前掲論を参照にしつつ、「悠々荘」(初出「サンデー毎日」1927年1月)との比較を行い、<門の外見(一章)>→<門から出る(六章)>という展開の類似性を指摘している。ほか、宮坂覺(2007)などは、山房内が「カプセル」のような「一種の密閉空間として演出」されていると説く。

もっとも、玄鶴山房という屋内が、外界とはどこか異質な空間になっているといっても、それは見てきたような構成等の問題だけではないだろう。筆者が山房内の描写で特に注意したいのは、物語の舞台となるこの玄鶴山房という空間(トポス)にいる堀越家の人々——特に、男たち——の性質なのである。

実際、本作では山房内にいる「男」たちは、みな無能であったり、女性的であったりして、どこか去勢された男のような性質を備えている。具体的にいうと、婿の重吉は「豪傑肌の父親よりも昔の女流歌人だつた母親に近い秀才」とされ、その眉は「女のやうに優しい」というが、ここから、彼が男性性に乏しく、女性的な男である事が窺える。それから、妾の子の文太郎なども「父の玄鶴よりも母のお芳に似た子供」とされ、これも重吉同様に女性的な優男風である。家長である玄鶴は、寝たきりで何も出来ない老人であるから、「『男』を感じ」とされるのは、家中で唯一、子供の武男のみなのである。

3) この分類については、橋浦洋志(1995)「「玄鶴山房」考—孤立した時間—」『文芸研究(東北大学)』の指摘——すなわち、物語が「重吉<二>→お鈴<三>→甲野<四>→玄鶴<五>」という順に「中心を入れ代」えながら進んでいくという指摘(p.46)——を参考にした。

また、こうした山房内の<非-男性>的特徴は、山房内の人々が「男」という「性」を忌避したがる点にもあらわれている。実際、彼らは作中、しばしば「男」に対する嫌悪感を口にする。例えば 以下のような場面がそれである。

重吉は小説などを讀んでゐるだけに武夫のはしやぐのにも『男』を感じ、不快になることもないではなかつた。——「二」

これは武夫が食事中にはしゃいだ時、父の重吉が不快になる場面であるが、ここで拒絶の対象として、「男」という性がカッコつきで、強調されていることに留意したい。これは重吉の「男」に対する根源的な厭悪感を示唆するものであり、その女性的性質(<非-男性>的性質)を強調するものといえる。また、甲野が重吉を揶揄した時なども、「輕蔑する一匹の雄にも違ひなかつた。」として、「男」という性に対して、やはり特別な嫌悪感が表明されているし、お鈴なども「彼女の目には妙に惡賢い男らしかつた。」として、やはり「男」(お芳の兄)を警戒している。

いずれにせよ、山房内ではこのようにして「男」という性を忌避(警戒、侮蔑)する磁場が形成されている。そうして、「女」達と、この「女性的な男」達による<女-女>関係的な人間関係が形成され、(ときにヒステリーを含む)神経戦的な争いも展開されるのである。

## 4. 母性の両義性

見てきたように、本作の舞台となる玄鶴山房というトポスは、「男」を忌避する人物たちによって構成されている。また、それによって<女-女>関係的な人間関係が形成されていた。

したがって、女性性の強い山房内は、厳格な父性というより、母性によって支配されているといってよい。しかし、注意したいのは、本作の場合、この山房という場所(トポス)では、どちらかという「母性」のもつ(「正」ではなく)「負」の性質のほうが前景化されているという点である。

では、母性の持つ「正 / 負」の性質とは何か。それについては、ユング心理学の次のような説明をみよう。

「母性の原理は「包含する」機能によって示される。それはすべてのものを良きにつけ悪きにつけ包み込んでしまい、そこではすべてのものが絶対的な平等性をもつ。「わが子であるかぎり」すべて平等に可愛いのであり、それは子供の個性や能力とは関係のないことである。/ しながら、母親は子供が勝手に母の膝下を離れることを許さない。(略)このようなとき、時に動物の母親が実際にすることがあるが、母は子供を呑みこんでしまうのである。かくて、母性原理はその肯定的な面においては、生み育てるものであり、否定的には、呑みこみ、しがみつきて、死に到らしめる面をもっている。 / これを余りにも単純で抽象的な説明とするならば、ユングが母性の本質として述べている三つの側面をつけ加えて考えてみると、もう少し具体的となるだろう。彼は、母性の本質として、慈しみ育てること、狂宴的な情動性、暗黒の深さ、をあげている。ここに、暗黒の暗さは何ものも区別しない平等性とすべてのものを呑みこむ恐ろしさを示している。」——河合隼雄(1976)『母性社会日本の病理』中央公論新社、pp.9-10

「母親元型の特性は「母性」である。すなわち、まさに女性的なものの不思議な権威。理性とはちがう知恵と精神的高さ。慈悲深いもの、保護するもの、支えるもの、成長と豊饒と食物を与えるもの。不思議な変容——再生の場。助けてくれる本能または衝動。秘密の、隠されたもの、暗闇、深淵、死者の世界、呑みこみ、誘惑し、毒を盛るもの、恐れをかき立て、逃れられないもの。(略)これらの両面的な特性を私はそこでやさしく、かつ恐ろしい母として定式化した。」——C・G・ユング(1954)『元型論』

※引用は林道義訳(紀伊国屋書店、1982)、p.129

ここで述べられているように、ユング心理学において、母性というものは、両面性を備えていると考えられている。すなわち、母性は大地の表象であるから、多くの「命」を生み、平等に慈しみ育てるという「正」の性質を備えているが、もう一方では、子供の独立を許さず、「個」としての自立を妨げ、それを拒めば、全てのものを「死」に引きずりこむ、恐ろしい「負」の側面もあるとする。

たとえば、神話に出てくる「鬼子母神」や「女夜叉」のイメージなどは、そのような母性の「負」(=死)の性質を具象化したものである。実際、ユングの弟子のE・ノイマン(1984)『意識の起源史(上)』(林道義訳、紀伊国屋書店)は、世界中の神話を詳察し、自分の子を去勢したり、八つ裂きにしたり、動物にしたり、食べたりする女神のエピソードを紹介しているが、このような「恐ろしい母」のことを太母元型としている。

そして、結論から述べてしまうと、玄鶴山房という場所(トポス)も、こうした<母性の持つ「負」の表象>と結びついているところがあるということである。——たとえば、前述の<「男」性を忌避(警戒)する人々>、<去勢されたような男たち>、<死の気配>、<腐臭>、<病

の雰囲気>は、こうした<母性の持つ「負」の性質>を、換喩的に連想させるものである。そして、特に主人公の看病をしている甲野という「男嫌い」の看護婦などは「恐ろしい母」の表象(あるいは、実質的な山房の支配者<sup>4)</sup>)ともいえる存在となっているのである。

## 5. 「離れ」について

これまで、本稿では「玄鶴山房」というテキストの空間(トポス)をめぐる問題に焦点をあてて読んできた。内容を確認すれば、このテキストの舞台となる山房という場所(トポス)は、<非男性的>な人物達によって構成され、「男」を忌避する磁場が形成されているということであった。そして、このことは山房内の空間が<母性の持つ「負」の性質>によって支配されているということとも相即しているということであった。山房内の<「男」性を忌避(警戒)する人々>、<去勢されたような男たち>、<腐臭>、<病気>、<死の気配>から換喩的に連想されるのは、ユング心理学のいう<母性>がもつ<負>の性質であるということであった。

ところで、このような<母性の「負」の表象空間>(玄鶴山房)のなかでも、特に禁忌の場所として描かれているのが、主人公のいる「離れ」という空間になる。前述した<腐臭>や<死の気配>も、この山房の「離れ」から漂ってくるものである。そして、この「離れ」こそ、本稿で注目したい「隅っこ」という空間であることは、繰り返すまでもない。

以下の箇所を読もう。

かう云ふ「離れ」にも聞こえて来るものは植ゑ込みの竹の戦ぎだけだった。——「二」

「離れ」の中から何か氣味の悪いものがついて来るやうに感じてならなかった。——「三」

お鈴の聲は「離れ」に近い縁側から響いて来るらしかった。——「四」

これらは、物語の「二章」、「三章」、「四章」の最終段落からの抜粋である。前述したように、本作は、それぞれ語り手(「一」)、重吉(「二」)、お鈴(「三」)、甲野(「四」)、玄鶴(「五」)、重吉(「六」)が焦点人物となって構成されているが、語り手は「二」「三」「四」の各章を、このよ

4) 甲野が玄鶴山房において支配者のような位置にあることは、山房内の人々が甲野に遠慮しているような点にも表れているだろう。もっとも、甲野自身が心理的に山房を支配しようとしていたことは、橋浦前掲書(p.47)にも指摘されている。



うに「離れ」へと目を向ける形で終わらせている。

西原前掲論は、本作には「離れ」に対する読者の先入感を、少しずつ植えつけていく「伏線」があるとしているが<sup>5)</sup>、上記のような展開なども、ストーリーの進行とともに、山房の奥(隅っこ)にある「離れ」(第五章)に読者の興味を向けていこうとする方向づけを生んでいるといえるだろう。

こうした描写をみると、「離れ」(隅っこ)は、山房の最奥部にある何か特別な意味をもった場所であるように示唆されているが、語り手は最終的に、このような「離れ」にいる玄鶴(第五章)に向けて、読者の興味を誘導しているようにも見える。

では、その「離れ」では、何が行われているのであろうか。先に述べたように、本作において山房全体が、母性の「負」の表象空間であるとする<sup>6)</sup>と、「離れ」はそのなかでも、特に「負」性を帯びた禁忌の空間であり、(「隅っこ」にある)いわば「子宮」のような空間といえる。そして、この場所では、甲野という「男嫌い」の暗い過去をもつ看護婦のもと、寝たきりの玄鶴が生殺しのような苦しみにあえぐ、という地獄的な風景が展開されている。

そもそも、この甲野という看護婦は「他人の苦痛を享樂する」という嗜虐趣味があり、重吉夫婦の「幸福」に「嫉妬」しているとされる。そうして、わざと重吉を誑かしたり、二枚舌を使ったりして、山房内の人間関係をかき回そうとする。そうして玄鶴に間接的な形で心的ストレスを与えたり、家庭内悲劇をみて、陰湿な笑みを浮かべたりするのである。このような女性こそ、まさに先のユング心理学でいう「鬼子母神」や「女夜叉」といった母性のもつ負の側面を象徴する存在といえるであろう。こうした彼女の《男性蔑視》の傾向も相俟って、山房内の《女性の「負」の傾向》は一層強調されていく。

いずれにせよ、玄鶴山房に地獄があるとすれば、それはこの甲野という恐ろしい母(太母)の存在によっている部分が多い。主人公は「離れ」(隅っこ)という母胎(子宮)のなかに閉じ込められているが、その空間から抜け出すことが出来ず、この甲野という看護婦(恐ろしい母)の監視下において、じわじわと衰弱し、ついには死んでしまう。もちろん、主人公自身は、自分の苦しみの一端が、この甲野によって(間接的に)もたらされていることを知らない(たとえば、愛人の子供の喧嘩の声を聞かされたり、自殺の計画を「看破られ」阻止されたりするなどの苦しみ<sup>6)</sup>)。

5) 西原千博(1980)「「玄鶴山房」試解」『稿本近代文学』、p.84 参考

6) 玄鶴が自殺を武男に発見される場面について、私見を述べるのが許されるのであれば、これは甲野が武男をけしかけて発見させたのではないか、ということも出来るのではないか。つまり、これは偶然ではなく、甲野による策略だったということである。だとすると、この玄鶴にとって大変な恥辱的な出来事は、甲野による陰湿なハラスメントの結果という事になる。——もちろん、これは甲野というキャラクター設定や日ごろの行為などから推測されるものにすぎない。ただ、テキストの空白部分を、そのような想像で埋める自由も読者には許されているだろう。

しかし、読者はそのような人間模様を、(語り手と一緒に)全知のような視点から眺めることで、逆に「女の怖さ」を見るのであり、そこから本作における「女嫌い」(ミソジニー)的な主題も浮き上がって来るのである。

## 6. むすびに

以上、今回は芥川晩年の「玄鶴山房」を取りあげ、主に山房という空間(トポス)の問題に着目して考察してみた<sup>7)</sup>。再度、内容のポイントだけ振り返れば、山房内に「男」を忌避する磁場が形成されていること。—そういう山房は<母性の「負」の性質の表象空間>になっているということ。そして、その隅(奥)の「離れ」は、<子宮-空間>とよべる場所で、玄鶴はそこで(彼自身は気づいていないが)、甲野という「男嫌い」の看護婦に陰湿な嫌がらせを受けているということ。また、そういう風景を全知的な視点から語り手と一緒に眺めることで、本作から「女嫌い」のような主題も逆に浮かび上がってくる、ということであった。

さて、こうした場所(トポス)をめぐる問題が、芥川の文学史において重要になるのは、冒頭でも述べたように「素戔鳴尊」などとの比較においてではないかと思われる。—というのも、大正9年(1920年)に発表された「素戔鳴尊」というテキストにも、<母性の「負」の表象空間>としての「洞窟」(隅っこ)が登場し、その洞窟のなかで大気都姫という太母に誘われて、主人公が酒色にふけり、徐々に男性性(あるいは生命力)を喪失して無能になっていく姿が描かれているのである。

洞窟の中は広かった。壁にはいろいろな武器が懸けてあった。それが炉の火の光を浴びて、いずれも美しく輝いていた。(略)素戔鳴は、この春のような洞窟の中に、十六人の女たちと放縦な生活を送るようになった。/一月ばかりは、瞬く間に過ぎた。/彼は毎日酒を飲んだり、谷川の魚を釣ったりして暮らしていた。

7) 今回、筆者は「離れ」の空間を「子宮」「母胎」といった問題と関連づけて考察したが、こうした筆者の考察とは別に「玄鶴山房」の空間に着目する論は、早くからある。その主たるものを紹介すると、たとえば、海老井英次(1983)は、本作の「離れ」が、元々創作の場としてあった「書斎」「戯作三昧」などに登場する)の「なれの果て」にあたるトポスになると指摘している。一方で、東郷克美(1975)のように、玄鶴山房という建物それ自体を「反-自然」とみなしたものもある。

ここでは主人公が洞窟の中に閉じこもって、酒色にふけりながら、徐々に弱体化、退行していく場面が展開されているが、これは晩年の「玄鶴山房」において「離れ」という空間のなかで、甲野のもと、じわじわと衰弱していく玄鶴と、実は構図的によく似ているのである(このことは、水洞幸夫にも指摘がある<sup>8)</sup>)。

両者の類似性を図にすると、次のようになる。

作品	「素戔鳴尊」 大正9年(1920年)	「玄鶴山房」 昭和2年(1927年)
場所	洞窟(子宮)	離れ(子宮)
支配者	大気都姫(太母)	甲野(太母)
行動	主人公が酒色にふけて、徐々に弱体化。 (退行現象)	主人公が何も出来ないまま、弱体化。 嫌がらせを受ける。

もっとも、ここで注意したいのは、「素戔鳴尊」の場合は、主人公が最終的に大気都姫を殺害して、洞窟(子宮-空間)から抜け出し、その父性を回復するのに対し、「玄鶴山房」のほうは、主人公が最後まで、離れ(子宮-空間)から抜け出せず、結局何も出来ないまま、じわじわと衰弱して死んでいく、という点である。

このように「隅っこ」(子宮)というトポスに注目してみると、「玄鶴山房」の発表された大正9年(1920年)から、「玄鶴山房」の掲載された昭和2年(晩年)にかけて、芥川文学には、<父性の弱体化>という傾向があったのではないかということが伺える。(ここでいう父性とは、恐ろしい母(太母)なるものに拮抗するような男性原理の力である。)

もちろん、それは<女嫌い(ミソジニー)>の主題とも交差してくる。実際、芥川の後期文学をみると、女の恐ろしさを描いたものが、しばしば登場する。—たとえば、「男の女を猟するのではない。女の男を猟するのである。」(「侏儒の言葉」)という語にも端的に表れているように、晩年の作品群には、女性恐怖を描いたものが多く、具体的には「河童」における雌の河童に気違いのように追い掛けられる雄の話や「歯車」における「復讐の神、—或る狂人の娘」の話などに、かかる主題を見出せるのである。

そうして「玄鶴山房」で展開されている「地獄よりも地獄的」な世界もまた、“女性恐怖”、“去勢不安”といった主題から派生している。特に甲野の存在などは、まさに芥川文学晩年の「復讐の神」の如き存在ともいえるのであろう。

8) 「玄鶴山房」の「離れ」と「素戔鳴尊」の「洞窟」の間に類似性を認める指摘は、水洞前掲論にもある。(注1参照)

いずれにせよ、そのような<女嫌い(ミソジニー)>的な問題が意味するものとは、一体何なのか——今回は枚数的な都合もあって、空間(トポス)というテーマに絞って考察することしか出来なかったが、今後は「玄鶴山房」における「新時代」の問題や、「死」をめぐる問題、物語の創作手法をめぐる問題など、多角的に考察していくことで、かかる事柄についてさらに考察を深めていきたい。

※ 追記。本稿は「韓国日語日文学会 冬季国際学術大会」(2017年12月16日)において、口頭発表したものに、加筆・修正を加えたものである。

### 【参考文献】

- 市川浩(1984)『<身>の構造』青土社  
 宇野浩二(1953)『芥川龍之介』文藝春秋新社  
 海老井英次(1972)「玄鶴山房——<新時代>意識を中心に」『国文学』17-16、学燈社  
 \_\_\_\_\_(1983)「芥川文学における空間の問題(一)——「戯作三昧」の<書齋>と「玄鶴山房」の<離れ>」『文学論輯』29、九州大学教養部文学研究会  
 奥野健男(1999)『文学のトポロジー』河出書房  
 \_\_\_\_\_(1972)『文学における原風景』集英社、p.109  
 河合隼雄(1976)『母性社会日本の病理』中央公論新社、pp.9-10  
 金静姫(1994)「芥川龍之介『玄鶴山房』の世界」『現代社会文化研究』1、新潟大学大学院現代社会文化研究科、pp.283-304  
 水洞幸夫(1985)「「玄鶴山房」試論——閉じ込められた<鏡>と<匂>——」『金沢大学国語国文』10、金沢大学国語国文学会、pp.65-74  
 東郷克美(1975)「「玄鶴山房」の内と外——「山峡の村」の意味をめぐる——」『文学年誌』1、文学批評の会、pp.149-171  
 西原千博(1980)「「玄鶴山房」試解」『稿本近代文学』3、筑波大学日本文学会近代部会、pp.75-89  
 橋浦洋志(1995)「「玄鶴山房」考——孤立した時間——」『文芸研究(東北大学)』日本文芸研究会、pp.43-51  
 蓮池文雄(1957)「「玄鶴山房」論」『愛媛国文研究』6、愛媛国語国文学会、pp.50-62  
 濱崎俊一(1991)「芥川龍之介研究——「玄鶴山房」論——」『静大国文』静岡大学人文学部国文談話会、pp.45-54  
 早澤正人(2015)「「素戔鳴尊」論——<父性原理>と<母性原理>をめぐる問題——」『日本近代學研究』第48輯、pp.191-207  
 \_\_\_\_\_(2012)「芥川龍之介「雛」論——空間構造の視点から——」『文学部・文学研究科 学術研究論集』第2号、pp.1-8  
 林道義訳(1984)『意識の起源史』紀伊国屋書店。Erich Neumann, Ursprungsgeschichte des Bewusstseins.(1949)  
 \_\_\_\_\_(1982)『元型論』紀伊国屋書店、p.129。Carl Gustav Jung, Von den Wurzeln des Bewusstseins(1954)  
 平岡敏夫(1969)「玄鶴山房」『芥川龍之介作品研究』八木書店  
 前田愛(1982)『都市空間のなかの文学』筑摩書房  
 三嶋義(1980)「「玄鶴山房」の成立とその方法」『近代文学論集』6、日本近代文学会九州支部、pp.11-18  
 宮坂覺(2007)「芥川龍之介『玄鶴山房』論——遠景化され、消されてしまう<個>——」『解釈と鑑賞』72-9、至文堂、

pp.154-162

三好行雄(1980)「『玄鶴山房』の世界・素描」『国語展望』小学館、pp.6-12

山本健吉(1943)「芥川龍之介論」『近代日本文学研究』大正文学作家論』下巻、小学館、p.202

吉田精一(1942)『芥川龍之介』三省堂

---

논문투고일 : 2018년 04월 03일  
심사개시일 : 2018년 04월 18일  
1차 수정일 : 2018년 05월 07일  
2차 수정일 : 2018년 05월 15일  
게재확정일 : 2018년 05월 17일

---

---

 <要旨>
 

---

## 芥川竜之介『玄鶴山房』論

- &lt;離れ&gt;という空間(トポス) -

早澤正人

本論は、芥川龍之介『玄鶴山房』(初出「中央公論」1927年1、2月)における、主に「離れ」という空間に着目して考察したものである。というのも、芥川文学では、しばしば「隅っこ」という、薄暗いじめじめした空間が描かれることが多いが、「玄鶴山房」における「離れ」もまた、この「隅っこ」に属するものになる。「隅っこ」は、トポロジーでは、母胎や子宮の表象のような場所として機能するといわれているが、病床にある主人公もまた、そのような子宮(離れ)という空間のなかにあるといえる。もっとも、母胎・子宮の表象空間といっても、本作の場合、母性は「正」ではなく、「負」の意味で用いられているのが特徴的である。主人公は、「離れ」(子宮)という病床にとじ込まれた状態にあり、そこで甲斐野という他人の不幸を享受する嗜虐趣味をもった太母(恐ろしい母)によって、間接な嫌がらせを受けながら、最終的に衰弱していき、死んでしまう。従来の研究では、本作は「地獄よりも地獄的な世界を描いた作品」——あるいは「芥川晩年の陰鬱とした心象風景が描かれた作品」などといわれているが、その「地獄的」な世界とは、具体的に「菌車」や「河童」などにもみられる＜女嫌い＞的なモチーフから派生しているのではないのか。

## A Study of Ryunosuke Akutagawa's Genkaku Sanbo

- Space (topos) called "Hanare" -

Hayasawa, Masato

This paper discusses Ryunosuke Akutagawa's Genkaku Sanbo (first appearance in "Chuo Koron") with a focus on a space called "hanare" that appears in the work. In Akutagawa's literature, there are often descriptions of a gloomy and damp space called "sumikko" (corner). "Hanare" in Genkaku Sanbo is a type of "sumikko." It is said to function as a place that represents a mother's womb in topology. We can say that the lead character, who is bedridden due to illness, is also in a womb-like space (hanare). It may be a space that represents a mother's womb, but this work is distinctive in the way it uses motherhood in a "negative" sense. The lead character is confined to a bed in "hanare" (womb), becomes weak, and eventually dies. All this while he is being indirectly harassed by named Kono, with a sadistic nature. Traditional studies argue that this work "depicts a more hellish world than hell itself" or "portrays Akutagawa's somber imagined scenery in the last stage of his life." But this "hellish" world may have been derived from the "misogyny" motif seen in Haguruma and Kappa.